

世界は動いている

令和8年5月19日

森田晃司

1. 世界の動向

①．中東情勢

サウジアラビア、UAE、カタールなどの中東各国には、併せて十六か所ほど米軍基地があるそうです。

今回の米・イスラエルによるイラン爆撃に対する、イランからの報復で、多くの米軍基地が、湾岸地域を中心に壊滅状態に陥り、米軍兵士は近隣のホテルに退避していると伝えられています。

自国の安全保障を米軍に委ねてきた国が多い中東ですが、今回の事態を受けて、衝撃が広がり、カタール政府などは「カタールの米軍基地は、カタールを守るのではなく、イスラエルを守っている」などと非難しています。

トランプ大統領は、作戦は順調に進み、イラン軍は完全に破壊された、と強気の姿勢を崩していません。

しかし、自衛隊 OB の矢野義昭氏などによれば、米軍基地は壊滅し、イスラエル本土もイランのミサイル攻撃を防御できず、軍事施設は破壊し尽され、戦闘能力を全く失っているのが実態とも伝えられています。

米国とイランとの間の終戦交渉がどのように進展するのか、予断を許さぬ状況が続いていますが、中東各国で、米軍への安保依存が見直され、

石油取引を米ドルに限定していたペトロダラー体制による米ドル一極支配が崩れ、中東各国の米国離れが進む気配が濃厚となっています。

更に、米国の後退を見越してか、従来、いがみ合ってきた中東の大国、トルコ、サウジアラビア、イランの間での連携が急速に深まるとの観測も出てきています。

中東は大きく動いています。

②．米英の動き

一方、5月7日に実施された英国の地方選挙で、反グローバリズムを主張し、厳しい移民政策を掲げる新しい政党の「リフォーム UK」が大躍進しました。

何と2議席から、1443増の1445議席まで驚異的に伸ばして第一党に躍進しました。

政権与党の労働党、伝統の保守党とも惨敗し、長く続いた二大政党時代の終わりを告げる結果となっています。

英米両国はいわば兄弟国家です。ロンドンのシティーとニューヨークのウォール街とはタッグを組んで国際金融資本による世界支配を目指してきていました。

兄貴分の強かった十九世紀は、“パックスブリタニカ”と呼ばれ、ポンドの時代でした。

第一次、第二次大戦を経て、世界の覇権は米国に移り、米ドル一極体制が続きましたが、近年、米国の威信低下と国内外の混乱が覆い隠せなくなってきました。

英国シティーは、米国から世界の覇権を取り戻し、英連邦を中心にした旧秩序の復活を目指し始めたという見方も、欧米の識者の間で出てきています。

目指すのは New World Order であり、テクノ・ファシズムによる世界支配です。AI などの圧倒的な技術革新を駆使し、国境を取り払った世界を統一的に支配する体制を目指します。

③ 。中露、グローバルサウス

5月14日には、米中首脳会談が予定されていますが、両国は G2 による世界支配を目指すのでしょうか。

中国を始め、BRICS 各国やグローバルサウスは急速に国力を高めています。独・仏・伊などを始めとする欧州各国も生き残りをかけて、ナショナリズムを掲げる新しい政治勢力が台頭してきています。

ロシアは、自国の文化・歴史・宗教を守り抜くという断固たる姿勢を堅持して、グローバルイズムと戦い続けています。

世界は大きく動こうとしています。

2. 注目される動向

① 。金融資本の内情はどうなっているのか

報道されない金融支配、ユダヤ支配の実態

FRB の実態と新議長（ウォーシュ就任）

シティーとウォール街の協調と対立

金融資本（グローバル大企業）と大衆の対決

資本主義（金儲け主義）は不滅か
戦争の世紀は続くのか

- ②。欧米（白人）の支配は続くのか
ユダヤ人は白人か、否白人か
シオニストとは何か、ユダヤは被害者か

過去五百年の白人による侵略、虐殺の歴史は償われるのか

人種差別は終わるのか

- ③。テクノ・ファシズムの行く末
AI の時代とは何か
AI 技術が世界を制するのか
AI 巨大企業による世界制覇はなるのか

宗教は復活できるのか
革新と伝統の対立か、融合か

- ④。グローバリズムとナショナリズムの対立
ナショナリズムの台頭と金融勢力の動向
ロシアは生き残れるか

- ⑤。G2（米中）による世界支配は実現するのか
両国は協調か、対立か、
金融資本はどう出るか

3. 日本の対応

翻って、我が日本では、こうした世界の動きに頑なに目を背け、色褪せた従米主義に縛られ、金融資本に跪き、“ドナルド、あなただけが世界に平和をもたらす！”などと叫んで抱き着いたりしています。まるで、ガラパゴスの如き隔絶状態です。

- ①。ますますの従米主義とバランスを欠いた外交
ロシアを敵に回す外交
イラン戦争でも親米一辺倒

② 。戦うことを放棄した国家運営

経済政策、農業政策、エネルギー政策、資源開発の無策

憲法改正の危険

現憲法の容認、

非常事態緊急法案の危険

品位と矜持のかけらもない高市政権への高支持はなぜか

自国の歴史、文化に誇りを失った国の末路

世界が刹那主義に陥っている、今こそ、皇室の有難みを噛みしめる時

以上